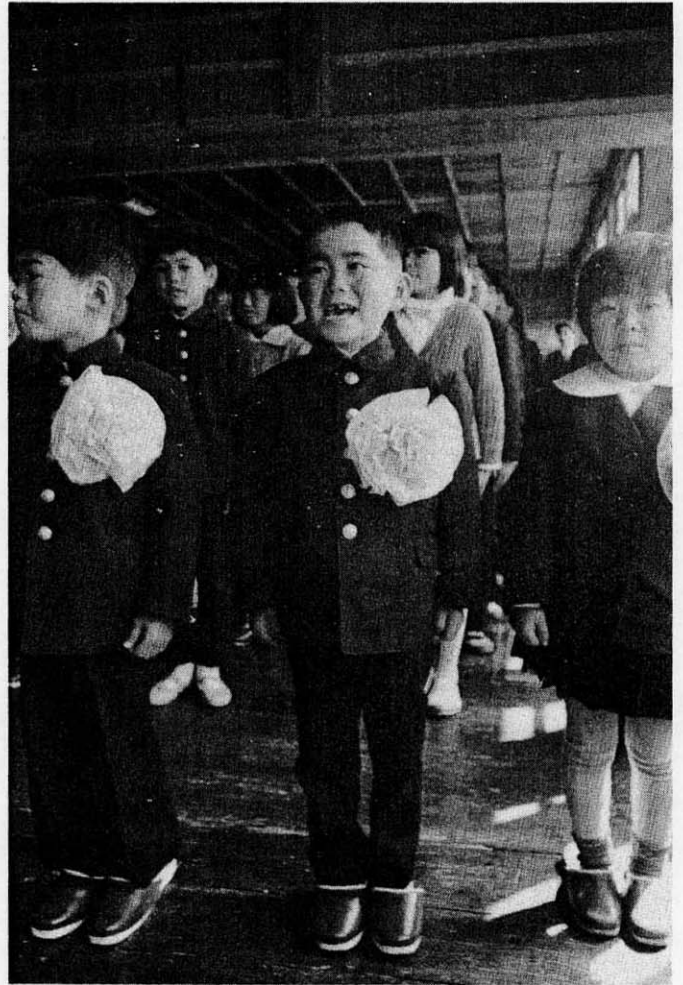


昭和49年度



昭和49年4月20日 編集発行・岡崎市教育委員会 印刷・研文印刷社



未明の時

創造の時思はする朝明けを心すがしく
山にま向う

未明の山河に毎日触れて、心の洗顔をすることを慣い
としている。純一無雑な一日を送りたい願いなのである。

中京女子大学教授

浅岡 美德

(7人の入学式 常磐南小)

— 教育随想 —

一生を貫ける趣味を

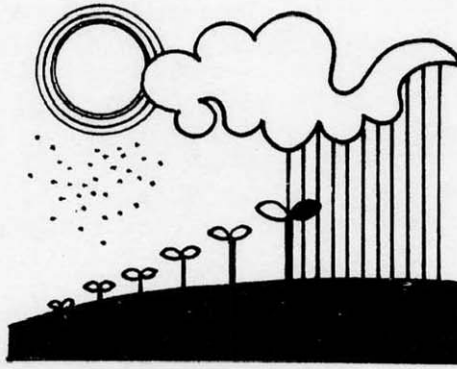
山本 甚一

かのユーモア作家源氏鶏太に、「停年退職」という小説がある。その中で、かれは、趣味のことにふれて、

・「碁だつて将棋だつていいのだ。釣だつて悪くないし、カメラ、そして絵を描くこともいい。とにかく、一生を貫けるような趣味を一つでもいいから持つておくことだ。」

・「その趣味の世界で一流になれたらもうし分がないが、二流であつても、三流であつてもかまわないわけだ」と語っている。この小説が、十年もまえ「朝日」に連載された当時から、わたしの胸にささっている章句である。

わたしたちは、物の豊かさとはうらはらに、心の貧しさを痛感する。「人間・人間関係」の社会から、「人間・機械系」の社会への急速な転移が、それにいつそのの拍車をかけている。そこでは、「何らかの趣味」をもち、心のうるおいを保つことがぜひ必要である。もはや、趣味が「つげたり」や「余り」であつてはならないし、「無趣味無芸と答えるのは男らしさの保証」などは、もつての



ささやかな歌集「彩雲」を編み、昨年短歌的自叙伝ともいふべき一文を、「形成」に発表したのである。

わたしたちの周囲には、「停年退職」を迎えて、一念発起、趣味をもとうとする人々がある。遅すぎるとばかりはいえまいが、趣味が「遅くとも十代のおわりに定着」するという英国人などに比ぶべくもない。長い年月にわたつて持続するのでなければ、趣味は定着しないし、まして、「一生を貫けるような趣味」は育たない。この持続には、趣味ととも、ときに苦しみを伴う。そういう道程の中にこそ、真の楽しみはあろう。わたしたちは、何としても、このような趣味を身につけたいものである。

「生活と娯楽とは区別されながら一つのものである。…娯楽が生活になり、生活が娯楽にならなければならぬ。生活と娯楽とが人格の統一にもたらされる必要がある。」

これは、往年の哲学徒三木清の立言であるが、この「娯楽」を「趣味」に置きかえても、いっそうに差支えなきところである。趣味が「他の仕方における生活」から、「生活の他のもの」となった現在では、趣味の価値や効用は、いっそう強調されているのであろう。

教育のことは、教師こそがアルファであり、オメガである。教師ひとりひとりが、「何らかの趣味」を身につけることは、「ゆとりある教育」にとつても、また意味があるのではなからうか。

いまはむかし



エンピツ

●石筆

一年生になつても、すぐに鉛筆は使えない。もつぱら石盤と石筆で「ハナハト マメ マス ミノ カサ カラカサ」と何回も練習した。大きい字が書けるしすぐ消してはまた書けるということを経済的。しかし、石筆はすぐに折れるし、粉が飛び散り不衛生になるといふ欠点があった。これは昭和十年ごろまで使われた。(二年生から鉛筆を使用)

●肥後守

鉛筆を削るのも、当時の子どもにとつて一仕事。「肥後守」の商標のついたナイフがよく使われた。切り出しなども高学年になるにつれて、うまく使いこなすようになった。「鉛筆の削り方と子どもの性格」を研究して論文を書いた教師もいたという。

授業にあいてくると、削りたくなる心



山中八幡宮の御田植祭

—デンデン ガツサリ—

岡崎市舞木町の山中八幡宮には、古くから、御田植祭（デンデン ガツサリ）が伝えられている。この神事は、正月三日の行事で、五穀豊饒を祈る古色豊かで素朴な神事である。

祭りは、大きく前歌・後歌・せりふ・所作の四つの部分からなっている。

○祭事の用意

- ・ 弁当 白米 二升炊き
- ・ 稲穂 鏡餅 一重（およそ二斗）
- ・ 鎌 お供餅 一個（およそ五合）
- ・ 太鼓

○奉仕の人々

- ・ 太鼓打ち 二名
- ・ 歌出し 一名
- ・ 牛になる人 一名
- ・ 歌い手 大勢
- ・ 年行司 若干

奉仕者・参拝者が拝殿に参集し、神官の祝詞に続き、太鼓の乱打と「田ごね」が始まり、太鼓の伴奏で「前歌」にはい

る。前歌は、歌詞の中に稲の品種・粳まき苗取・草取・稲刈・田植女と順に歌われる。

前歌に続いて後歌が歌われる。後歌は

十一節よりなる「伊勢踊」を歌い、弁当になる。（二時間ほど休む）

次にもういちど歌い、鏡餅・供餅を太鼓の上へのせ、「せりふ」にはいる。せりふは、稲の豊作を賞し、天候を評し、氏子の字名を呼ぶ。

つんばいになる。稲穂を牛の背にのせ、拝殿内をはい回る。その牛の倒れたところで、丈夫な牛でも倒れるほどの豊作だ」とよろこび、神前に牛を追い込み、鏡餅を小さく切り、餅投げをして、「所作」を終え、この祭りを終わる。

（現職教育音楽部）

基本旋律

てんでん がつさり (前歌) 高瀬 忠三 採譜

て エ ン て エ ー ー が つ さ り

ほ ち き り ら い て が つ さ り

変化旋律

京 一 ぼ の ア 5- の ぼ ア は あ ー

小 せ り ぶ こ の い ま お わ の

(後歌)

い せ の こ の こ の こ の こ の こ の こ の こ の こ の

と ー の こ の こ の こ の こ の こ の こ の こ の こ の

か こ こ せ れ れ せ れ せ れ せ れ せ れ せ れ せ れ

理は昔も今も同じ。授業中削ってこごとを受けたり、農家の子は鎌で削ったりしたもので。

●筆入れ

鉛筆といっしょに筆入れに同居していたもの、ビー玉、小銭、かぶと虫など。授業中、かぶと虫がかつそりとふたを持ち上げ、のそのそはい出し大あわて、などという情景もみられた。

●戦時下と鉛筆

戦時中の物資不足、鉛筆も例外ではない。「豆になるまで使え」といわれ、鉛筆挟みを工夫したり、キヤップをつけたりして使った。材料はすべて国産、削りにくい固い材、すぐに折れたり、スッポリ抜けたりする芯。おまけに色もうすく、ちびた鉛筆をなめながら書く、というしぐさがどの教室にもみられた。

●鉛筆削り器

十余年前「刃物を持たない運動」が展開された。このころから削り器が急速に普及。安全で能率的ではあるが、ナイフの使えない子が激増。ナイフが使えないということは、脳の発達にいい影響を与えないと心配する学者もいる。

●現代のペン

書き方鉛筆、色鉛筆、サインペン、ボールペン、万年筆など現代の子は実に多様な使い分けをする。小学生でも五、六種持っている子はざら。筆入れ箱も三つくらい必要になってくる。

（写真は本多光太郎愛用の万年筆）

誕生日のプレゼント

T・Y生



彼は今年も「誕生祝い」を子どもたちにやってやろうと思った。昨日も子どもが手紙をくれた。

「先生、たん生日のお祝いどうもありがとうございました。家に帰って手紙を読んで、うれしくてうれしくてたまりません。あんなにほめていただいて、先生のたん生日はいつですか……」

子どもからの手紙に、単純な彼はすぐ喜んでしまうのだ。ふと、今年の年賀状のことを思い出した。

「賀正 私是一年生と六年生に子どもをもつ親です。十二月二十六日生まれの誕生日のお祝い状、本当にありがとうございます。つよいよい文で子どもたちを見守ってくださる先生に、とても感動しました。先生のはげましの文が、六年生の子には絶対に心に残り、今後のはげましになるだ

ろうと……楽しみがわき出る思いで、札状を出さずにおれない気持ちで一ぱいです。」

親までこんなに喜んでくれるんだからな。彼はそう思って、せっせと、毎日ひまをみては誕生祝いの便箋、封筒をつくり、先生を入れて四五〇名近くの誕生祝いの迷文を書いている。(矢作西小)

開く

4月の学園



「スクラム」組んで

梶尾長夫

「きょうも出たぞ」学級通信「スクラム」を手にした生徒の声。新学期始まってから、毎日渡しているわら半紙半切のさざやかなものである。

私の学級経営は、この「スクラム」を軸に展開される。生徒の問題を、問題とした紙面が作り上げられた時、質的に高い学級経営がなされたときを考えている。ところが、「スクラム」は時々、道草を食うし、エンストも起こしやすい。「ことしこそは」と張りきって始めても、いつの間にか、一週間に一回発行というようになり果てる。忙しいからということ

を口実にしながら。

毎日続けるためには、材料が必要だ。材料は生徒の生活そのものである。生活を記録させることが、その手はじめである。「ひとりごと」「グループ日記」「教室日記」、父兄との連絡には「家庭と教師のりれり日記」がある。だから、材料にはこと欠かない。むしろ、何をテーマとし、何を選択するかが課題となる。

最近、親と子の断絶ということが言われています。……話し合いというものは、そういう意見のくい違いを少しでも縮めるための一つの手段ではないでしょうか。……「スクラム」は、そういう意味で、子どもと少しでも理解しあえる、とてもよい企画かと思えます。これからも、引き続きよろしくお願いいたします。

「スクラム」は、帰りの会や道徳の時間に利用される。もちろん、学級会での話し合いの資料ともなる。話し合った内容は、次の紙面に取り上げられる。子どもと、父兄の声に支えられてガリをきる私である。

(岩津中)

家庭への働きかけを

畔柳吉朗



教師、子ども、家庭を太いパイプで結びつきたい。これが、私の学級経営の基本である。ところで、教師と家庭と接触する機会は比較的少ない。親への働きかけをどうするかが、私の学級づくりのこだわりである。

●学級通信「なかま」の発行

給食のあと、○○子さん、教室を歩いてくれた。パンくずが散らかっていた。A班の人たちも気がついて手つだってくれた。……

学校生活を家庭に知らせるとともに、

子どもたちを励まし、力づけるものもある。毎日発行することは、たいへんだ。「先生、家の子あんなことをするようになったのですか。きょう、ほめてやりました」と、親から電話をいただいで「やっぱりよかつたな」と思う。

●親と教師のえんぴつ対話

学習や、生活記録を「計画表」に書き入れさせる。朱書を入れてやるのが楽しみだ。もちろん、親の意見も書き加えられる。親と教師との対話が生まれる。

●電話訪問

「○○君は、きょう宿題をやつて来なかつたな。電話してやろう」わが家の電話は忙しい。

●家庭訪問

毎学期一、二回。ただし、欠席や問題のある場合は、その日のうちに。

(男川小)

輝くまなざしに

こたえたい

木船京子

「なんだ、女の先生か。」

これが彼らの第一声であった。担任を保持した経験のない私が、不安と期待をもって、教室に一歩足を踏み入れた時であった。

昨年までは教科担任ということであったが、学級担任として教壇に立った今、まるで意識がちがっていることに気づいた。

小学校とは違った新しい世界にとび込んで来てとまどう生徒。ふ厚くなつた教科書をつめ込んだカバンの重さに、中学生の味をかみしめている生徒。彼らひとりひとりの輝くまなざしを見ていると、「この子どもたちの夢を破つてなるものか」という誓いにも似た激しい衝動を覚えるのである。

これから一年、この子どもたちに、

・教師の干渉や命令は極力避け、速効的な成果を期待しないで、思いきつて生徒の活動や発言を重んじたい。

・無難に進めようとするあまり、魅力に欠けた小粒な生徒にしないで、進

取の気性に富んだスケールの大きい生徒にしたい。

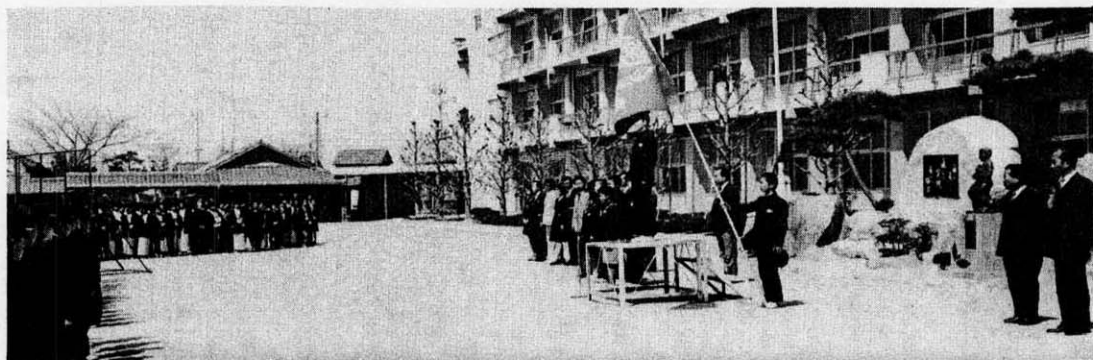
・名まえを呼ばれた時や、朝夕のあい

さが大きな声でできる生徒、はきものそろえ方などにも目を向ける生徒、背すじを伸ばして勉強する生徒……

私の夢は、私の指導力に関係なくひろがっていく。

「担任が女の先生でよかつた」と思つてくれるまで、夢の実現に努力しようと思ふ。

(南中)





郷土を見直した有意義な一日であった。

◆新設普通科高校建設地決まる

岡崎市に五十年四月開校する県立の新設普通科高校建設用地が、竜泉寺、藤川両町地内に決まり六万三千七百六十三平方メートルの用地買収が完了した。

◆新任教員郷土学習会
ことしも七十八名の新規採用の先生方を迎え、その研修が始まるが、そのではじめが二十四日の新任教員郷土学習会。何をおいても、まず教育の基礎となる郷土の理解をとということで始め、ことしで五年め。教壇三週間、まだまだ、学生気分を抜けない先生たちだけにパスの中にぎやかなこと。それぞれ岡崎の広さに、美しさに、教育的環境の豊かさに触れて

県では六月上旬造成工事にかかり七月にも校舎建築にかかる予定。三か年計画で、さしあたり本館、武道場、教室の一部を建て、将来は一学年八クラス、全校で二十四クラスの規模を予定しており、学校群の事情もきびしいだけに、その完成が待たれている。

◆小中学校長会長に神尾先生(養中)

同副会長 小浜保(梅園小) 小学校長 会長 小浜保(羽根) 中学校長 会長 神尾菊平、副会長 原田市郎(南) 鈴木光の諸先生。

鳥居敬一先生ご逝去

生平小学校長鳥居敬一先生は十三日午前零時五十五分、知立市西中町の自宅で心臓マヒのため急逝された。五十五歳。



先生
は昭和十三年
岡崎師範卒後
愛知郡首掛小

をふり出しに教育界へはいられたが、その後専攻科に戻られ同十七年卒業。以後附属小などを経て三十年。矢作西小ではじめて教頭。岩津小、山中小、六ツ美中と長い教頭歴の後、昨年四月生平小学校長に就任された。生平小では気鋭の校長として、専攻の国語教育の他にも、郷土の民話の発掘刊行、学習日課の合理的運営、蛍の保護を仲だちとした姉妹校提携の実現、トランペット鼓笛隊の創設等々次々に創意に溢れた教育活動を推進され児童、学区民の信頼を集めておられた。

ひと切れの
サンドイッチ

吉見和子

給食の時である。子供たちが半分ほど食べ終わったころ、私より少し離れた席のT君が弁当箱のサンドイッチを取り出し、「これ、食べな。」

かがみ

生きがい育てる

本多順子

と言って、隣の席のM子の弁当の包み紙の上のせたのがちらと見えた。M子は、弁当を蓋で隠しながら食べている。お茶は梅干一個であることがわかった。彼女は、準援の母子家庭に育ち、知能も低く、日ごろから他人と没交渉で、小さい自分の殻の中に閉じこもって暮らしている。

私が担任した四年生のAは、勉強は大嫌いだ、ソフトとなると生き生きしてやる。自分から本を買ってきて級友の指導を始め、夏休みには五年生に試合を申し込むことにした。練習計画から試合の作戦に至るすべてが、Aを中心に子供たちの手で進められた。技術は確かに五年生の方が上だと思つたのに、四年生が勝つた。その後、二回の対戦も一度は四年生の勝利だった。

T君の自然な思いやりの行為に対しM子がどう応待するだろうか、そっと息を殺して見守つた。幸いにも、M子は少し顔をほころばせておいて、そうに食べた。私は心の緊張がとけて、ほのぼのとした温い安らぎを覚えた。

「チームワークで勝つた。」
「自分たちの問題として取り組んだところに勝因がある。」
と思つた。
自分たちの山の木を、秦梨ランドの四年生の記念樹にすることを思いついたのも、この子たちである。

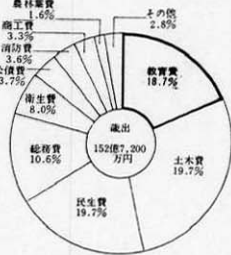
思いやりの心を育てるむすかしさを友情という自然の行為がみごとになしとげた。私だつたらきつときこちないことであるうに、子供はいともやすやすとなしとげた。(六名小)

こんなすばらしい子供たちが、限りなく伸びてくれることを期待して、任した。生きがいへの点火こそ、教師の仕事であると思ふのである。(細川小)



■一般会計歳出における教育費

内訳



項	予 算 額
1.教育総務費	212,603千円
2.小学校費	1,277,757
3.中学校費	341,397
4.幼稚園費	69,474
5.学校教育費	411,474
6.社会教育費	149,548
7.保健体育費	399,037
計	2,861,290

人間性豊かな人づくりと 文化の振興めざして

四十九年度教育費予算のあらまし

岡崎市の四十九年度予算は市民の福祉、教育、生活防衛、環境整備など市民生活を中心とする七つの重点項目を設定して、はじめて三〇〇億円の大台を越える総額三六二億九、九五三万円（一般会計一五二億七、二〇〇万円）の規模となった。

そのうち教育費は、二八億六、一二九万円（一般会計予算の一八・七四％）を占めている。直接学校教育に關係するものを中心に主な内容をもと次の通り。

▲校舎の大幅新・増改築 規定以外の特定財源が見込めないにもかかわらず、四十七年度実施の中学校特例建設事業費の償還を四十八年度に先取りし一般財源の確保に努めた結果、小学校四校（根石、羽根、福岡、六ツ美北部）中学校一校（矢作）の校舎増改築、さらに岡崎小の全校移転新築と過密学級の解消を図るため美合地区新設小学校の建設をそれぞれ二か年計画で実施するための初年度経費を合わせて七億一、九一五万円を計上

ほかに、岩津小屋内運動場の新設、細川小、竜谷小のプール新設に一億三千四百余万円を計上。
▲学校緑化の推進 四十八年度から五か年計画で始まった学校環境緑化事業二年めのごとしは、小学校五校、中学校三校に対して四六一万円。特筆されるのは

小中学校の育苗活動を進めるために一二〇万円を計上したこと。学校環境緑化に、引き続き二校が日本一を得るなどの実績を誇る本市のそれがいつそう促進されるというもの。

▲学校需用費の増額 消耗品の高騰に対応して小学校一校平均一一〇万円、中学校一校平均一六二万円を計上したが、特に中学校のクラブ活動用品費に二七〇万円（昨年一〇五万）を当て同活動の充実をはかる。

▲備品設置に新機軸 小中学校の備品費合わせて七、八六九万円中には引き続きピアノ九台、校内放送器具六校分、屋体暗幕六校分等も含まれるが、画期的な措置としては小学校全校に設置するVTR（カラー）が六四三万、特殊学級児童の運動機能訓練用トランポリン二十一学級分、中学校のプラスチックバンド楽器購入費三七一万円がある。いずれも新規で、現場の要請に応えるきめ細かな配慮といえよう。
▲現職教育研修補助の充実 本市独自の措置として大きな反響を呼んでいる個人研修費、団体研修費九一六万円は昨年より三〇万円増、教育研究所費中の旅費一九九万円（主として教員の県外研修費で二二〇人派遣分）

と合わせて一千万円を越すことになった。本年度教育の重点の一つである研修の充実が大いに期待される。

▲教育研究所活動の整備充実 これまで、とかく不明確だった研究所活動を点検、整備し名称にふさわしい研究研修事業を内容にして新発足することとなり経費も昨年度の九九九万円から一躍六倍半に及ぶ七四九万円を計上した。

▲各種委託研究活動の充実 これまでも現職教委各部等に委託してきた活動は多いが、本年度は指導研修費中に一七三万円（新規は小中連合音楽会、児童生徒会活動、技術家庭科作品展）教育研究所費中に三三三万円（新規はグループ研究、教育文化講座開設、郷土史編集調査）の委託料を計上、さらに多様な活動の充実をはかる。
▲学校保健、体育活動の強化 校医報酬、児童生徒各種検査（寄生虫、尿、心電図）学校職員胃腸検査等に、二七九万円。各種体育大会等に参加する児童

生徒の旅費を増額して一一二万円（昨年度六七万円）等を計上。
▲幼稚園就園奨励費の新設 私立幼稚園四歳、五歳児二、二〇〇人分の保育料の一部を市費で負担するために二六四万円を計上。幼稚園の公・私立による父母負担の格差是正を進める一助となる。

▲社会教育の拡充強化 少年愛護センター費を教育費に組み替えたほか、学校開放事業、子ども会、婦人学級、高齢者教室の所要経費、社会教育関係諸団体に対する補助金等についてもそれぞれ増額計上したが、その中で注目されるのが専任公民館主事十人の配置（八六四万円）と視聴覚ライブラリーの機器、資料の購入等（六四七万円）の措置である。それぞれ、公民館活動、視聴覚教育活動に新生面を開くことが期待される。
▲市民体育の振興と健康の増進 桑谷山荘一帯の遊歩道を整備して市民の憩いの場「森の体育場」（一、一二〇万円）を建設するほか、各種スポーツ大会開催費として（四、八四〇万円）を計上。なお待望の市民体育館の建設は、きびしい経済情勢のもとで、一年繰り延べを余儀なくされたが、四十九年、五十年の二か年継続事業として再度初年度分三億〇、二五〇万円を計上した。

4月の行事

1	月	辞令交付 桜まつり (15日まで)
2	火	
3	水	小学校入学式、始業式 婦連協新年度総会(婦人会館)
4	木	中学校入学式、始業式
5	金	小中学校退任式
6	土	
7	日	剣道野試合大会 (管生川原)
8	月	小中学校長会 (葵中)
9	火	社会教育審議会 (市役所)
10	水	月報「岡崎の教育」編集委員会 (市役所)
11	木	学校事務の手引編集委員会 (市役所) 教科指導員打合せ会 (市役所)
12	金	現職教育委員会総会・講演布川清司先生 (葵中)
13	土	桜まつり音楽パレード
14	日	桜まつりバレーボール大会
15	月	学級査定はじまる (井田～常東小)
16	火	愛知県緑化推進大会 (六名小、六名公園)
17	水	学級査定第2日 (愛宕～奥殿小)
18	木	学級査定第3日 (連尺～六中小)
19	金	定例校長会 (愛宕小)
20	土	文化財保護審議会 (市役所)
21	日	桜まつり卓球大会 (城北中) 桜まつりバスケットボール大会 (岡工高) 市青年団体連定期大会 (勤労青少年ホーム)
22	月	学級査定第4日 (三島～岡崎小)
23	火	学級査定第5日 (広幡～六北小) 月報「岡崎の教育」編集委員会 (市役所)
24	水	新任教員郷土学習の会 (出発十王公園) 緑化推進作品展 (29日まで市美術館)
25	木	学級査定第6日 (河合中～山中小)
26	金	県主事会 (名古屋) 教育費予算説明会 (市役所) 岡崎の歴史物語編集委員会 (羽根小)
27	土	
28	日	緑化推進作品表彰式 (市美術館) 桜まつり軟式庭球、軟式野球、ソフトボール各大会
29	月	
30	火	新任教員実技研修会 (羽根小) 学級査定第7日 (梅園～美合小)

- | | | |
|------------|-------|-------|
| ● 題字 | 内田 市長 | (岩津中) |
| ● タイトルイラスト | 杉浦 正明 | (福岡中) |
| ● カット | 安藤 平 | (常南小) |
| ● 表紙写真 | 三浦 重光 | |

埋もれた日本地図

谷川 健一

筑摩書房 800円

人々があまり訪れたことのない離島や山間僻地では、現代の文化を受け入れる速度はおそい。そこにこそ、今は忘れかけようとしている信仰、風俗、詩歌等を掘り起こすことができる。そうした埋もれた日本各地の習俗を、筆者が見聞した事実をもとに興味深く伝えてくれる。今もなお、むかしながらの習俗を守りぬいて生活している人々の生き方を読んでいく中で、どこかにひそんでいる日本人の心を感じることができる。

(矢作中 中山昌司)

この本を

子どもがする授業

— 授業創造と児童理解 —

長野県浜井場小著

明治図書 820円

子どもは本来「なまけ者」ではない。知りたがり屋であり、話したがり屋でもある。こうした子どもの授業に寄せる願いや主張を大切にし、授業の主体は子どもにあるとの教育観に立って「子どもがする授業」の本質を追究、発見した記録である。子どものもつ無限の可能性を事実を通して突きつけられ、改めてこの道の厳しさをしみじみと考えさせられた。(福岡小 小林幸代)

寸言

▲「継続は力なり」とは古人の言。十五年間「学級通信」を書きつづけた同僚がいる。愛情は継続より生まれる。

▲入学児に鼻紙折って持たせけり
久女

▲四月は子より親が緊張する。
教師は自分のマンネリ化を反省する。

▲教育とは結果に責任を負うことである。手術は万全だが、患者は死んだということは教師に

は許されない。
▲「菩薩心 活鬼の手」とは医師の訓。このごろ男の子がよく泣くと聞く。ほんとうに強いのは男か女か。

▲三月号「いまはむかし」中の愛二師附属国民学校の修了証書の記事について、同校十八年卒一同の名で次のように訂正してほしい旨ご指摘いただきました。訂正してお礼申し上げます。

(3) ページ 誤キリツヨクセヨ
↓正キマリヨクセヨ